

私の園の秋の自然物

松井田鶴子

幼稚園の庭は一般に学校の庭に比べて変化に富んでいるようです。私たちの園庭も起伏が多く樹令三十年ほどの木立が緑陰をひろげています。花壇面積が広く一隅には孟宗竹の林もあり情趣ゆたかな環境ということが出来ます。この庭は前任者の林こと先生の頃から三十年近くかかって整えられたものです。現在の私たちもこれを受けつぎ充実に努めていますので、その一端を記してみました。

敷地面積約九〇〇坪のうち

建坪約二〇〇坪

運動場二五〇坪

このうち夏木陰五〇坪

竹やぶ 一〇坪

小山 二坪

池 三坪

鶏小屋 二坪

ヒューム管や平釜利用

兎小屋 一坪

花壇 約四〇坪

温床 約 四坪

堆肥場約 四坪

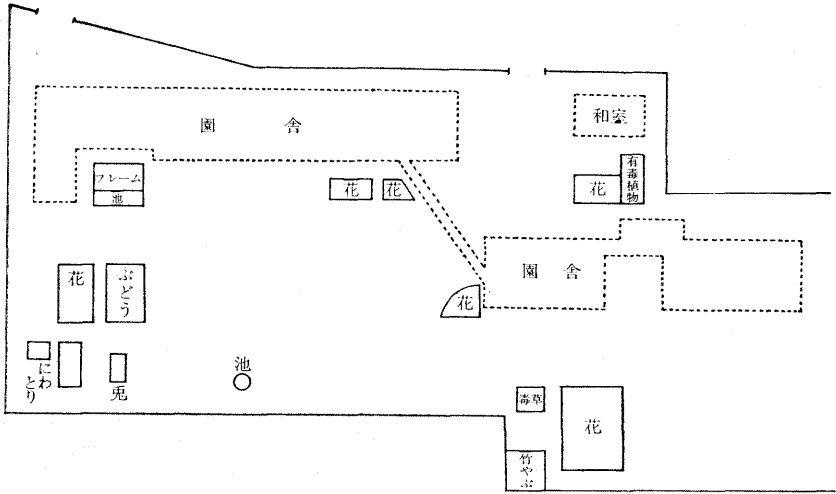
果樹 ぶどう棚・柿・ぎくろ

これらの庭に何を満たしていくかは、私たちの課題でもあり、楽しみでもあります。実際指導にあたる職員全員と相談し、長い年月かけて実現してまいりました。その観点をいくつかあげてみましょう。

○香りの高い花を門の近くに植える

いま木犀が秋風に匂っています。年間を通しては、冬の臘梅・早春の梅・四月の沈丁花・七月のくちなしと山百合などが門を入る子どもを迎える位置に植えてあります。

園 全 景



○野趣を失わない庭

竹やぶは下草が茂り、こおろぎ・とんぼ・蛙などが集まります。子どもたちは探険家気どりで虫とりをします。いのこづちの実が服についたり、龍のひげの紫の玉をさがしたりする素朴なあそびも楽しませたいので、除草もほどほどにして、一隅には雑草も生きていける庭にしたいと考えます。いま私は出張のたびに各地のたんぼほの綿毛をもらって帰り、たんぼほ園にまいています。同じたんぼほといっても特色があるように思われます。

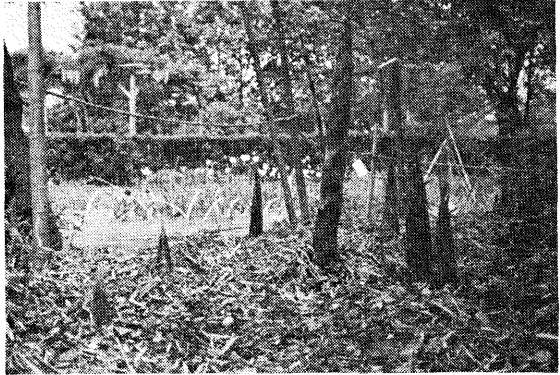
○毒草園を見やすい所につくる

九月下旬はひがん花の花ざかりです。十月に入るとアネモネの球根を植込み、ひなげし・花菱草のたねをまきます。木では、夾竹桃・エニシダ、宿根では鈴蘭・はまゆりなどがあります。これらは花屋の店にも売っているのでおかささん方も有毒植物とは気づきません。私たち教師も知らないことが多いのですが、学芸学部の生物学の五味助教授から指導していただきました。有毒といっても、さわって危険なほどのものは置きません。ままごとなどには使わないように注意させています。梅の青い実のなる頃には梅の木の下に子どもをつれて行って、猛毒について必ず注意を与えます。

○果実の収穫

都市に住む子どもは、木になっている果実をあまり知りません。

たけのこ



雪柳の花終り、かりこみ



るので、立札を立ててみました。
「この竹はたなばたに使います。
たけのこをとらないでください」
おかげで今年是一本も折られずすみませした。たな
ばたの日には、全部の子どもが竹の小枝をもらって
帰ります。

○子ども自身の鉢栽培

五才児はめいめい鉢を持ち朝顔とおじぎ草をそだて
ます。夏休み中は家でせわをしますが、秋には再び
園に持ち帰って、十月のたねとり、たねを袋に納め
るまで続けます。たねのまき時が半月おくれれば花
も半月おそく咲くかと思われませんが、実際には適期
を逸してしまうと全体に不調であることを昨年経験
しました。今年は五月十日を目標にまいいたので、夏休み前から咲
きはじめ好成绩をあげています。

たね取りを終ってあいた鉢には、十一月ころメラコイデス種の桜
草を植えて、冬の花を見させています。

○にわとりと兎

とりも兎も庭隅に、ただ飼っているというだけではあまり興味を
示しませんので、育つ姿をなるべく最初から見せるように心がけ
ています。ひよこを飼うのは非常に興味をもちますが、温度の調

せて園内でも、小さい青い果実がだんだん成熟するのを見たり、収穫の日には手のひらに果実の重さをずしりと受けた
り、給食の時においしさを味わったりして、生産のたのしきを経
験させたいと思います。ぶどう棚はデラウエアが今年には豊作で
す。果樹をおくことは教育上問題があるという意見もききま
す。幼児はよくいうことをきき、成熟するまでよく待ちます。近
所のいたずらっ子が侵入することもあるので、管理に適した位置
と高さをくふうする必要があります。竹やぶのたけのこを折られ



節がむずかしく途中で死ぬ場合が多いようです。幼稚園では菓についた母どりを置いて「ひよこのかあさんコッココ」のうたの状態で飼ってみましたら九割は育ちました。秋に入って若どりが産卵をはじめたので、子どもは交替に一個ずつもらって帰ります。エッグケースに納め布袋を肩にかけていきます。一度もらってからは産卵に気がつくようになります。温かい卵なんて幼稚園でないと持つてみることはないのが町で育つ子どもです。園の卵は貴重なものに感じるらしく、生産のたのしさがここでも経験されます。翌日容器を返す時、にわとりさんへお礼の手紙が入っていたり押麦や野菜が入っていたりします。

兎については、仔兎とあそぶ時期が興味の頂点のように見えます。母兎は三匹いて、白色・灰色・白黒のぶちです。一回に七、八匹生れる仔兎も又遺伝の法則にかなって、各種の仔がうまれるので、春には二十四匹近い大家族になります。毎朝兎を抱いてあそびたい子どもが兎小屋の前に集まって大繁盛を呈します。一月後には希望家庭にわけたり、小学校の教材にさしあげて、秋に入る頃は又三匹だけ残ります。もう大きすぎて抱くことはできません。最近は何をたべさせるのが興味の中心です。毒草以外の草をはじめは手あたり次第やっていますが、次第に何が好きか気づくようになります。家の台所の野菜くずも届けられます。

私の園の経験を通して一番強く感じることは、設備を活かすものは人の力だということです。大きな容器があっても満たすものが乏しければ、大きさが却ってわびしいものになりましょう。さいわいに私の園では用務の棚橋さんが、やさしいおじさんであると共に、専門の技能を持つ花つくりの名人でもあります。又、実際指導にあたる受け持ちの先生方も、自然愛育の機会をあそびの中にうまくとり入れて、情採ゆたかな教育につとめてくださっています。管理面と指導面が表裏一体の活動をする時、設備は百パーセントの効果をあげ得ると申せましょう。